

新善光寺 寺報 北 縁

2026年1月 Vol. 59

ほくえん



特集 知恩院に行ってきました!!

令和8年 年頭所感

お檀家のみなさまにおかれましては、清々しい新年をお迎えしたと存じます。日頃より、当山の護持運営にご理解ご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、本年は午年であります。“人間万事塞翁が馬”ということわざがあるように、今年も山あり谷あり、うれしいこともあり、また悲しいこともあるでしょう。幸不幸が入り混じりながら、過ごしていくこととなります。喜怒哀楽の荒波のなかで、自らが支えとなるものを持っているのか、それとも支えとなるものを持っておらず右往左往するのか、その違いは大きいと思います。その支えになるものは人それぞれですが、真理・真実を支えとすることは、どんなに時代が変わろうとも、どのように状況が変化しようとも、変わることはない大いなる支えとなります。そんな支えをより感じられる一年になりますことを祈念し、年頭の御挨拶といたします。

住職 太田 眞琴



前列左より

ほりうちかずき
堀内和紀
(53歳)

おおた しんかい
太田真海
(41歳) (副住職)

おおた しんきん
太田眞琴
(77歳) (住職)

おおた こうけん
太田光顯
(44歳) (清璋寺住職)

まつ おいつし
松尾一志
(90歳)

後列左より

なが おしょうぎょう
長尾省行(48歳)

たちばなしゅんぶ
立花俊輔(45歳)

各種法要について

現在、新善光寺では本堂を使った大きな法要を年5回おこなっており、コロナ禍以降は形態を変えておこなってまいりました。

具体的にいうとお彼岸の法要とお盆の法要は、以前は3回に分けて着席でおこなってまいりました。それを見直して着席せずに焼香をしていただき、そのままお帰りいただくようにしました。お参りしやすくなったとのお声もいただいておりますので、今後もそれを続けていきます。ですが、じっくりとお経を聞いてお参りしたいというお声もいただいておりますので、6月の御忌・永代経法要と11月の十夜法要は着席していただきじっくりとお参りできるようにしていきます。

すぐにお参りできる法要

- 3月 春彼岸法要
- 8月 お盆の法要
- 9月 秋彼岸法要



じっくりとお参りできる法要

- 6月 御忌・永代経法要
- 11月 十夜法要（法話あり）



納骨堂のご案内

前号でも紹介しましたが、昨年夏に新たに納骨壇を設置しました。

青を基調としたスッキリとしたデザインとなっており、おかげさまで多くの方にご見学やお申し込みもいただいております。ご興味のある方は是非ともお問い合わせください。



知恩院に行ってきました!!

副住職 太田 真海

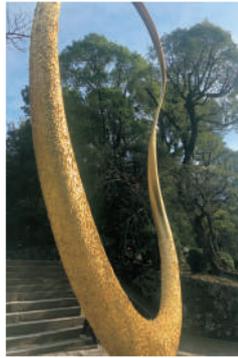
浄土宗の総本山は京都にある知恩院です。今回は札幌慈啓会創立100周年に際し、浄土門主の伊藤唯眞猥下より光栄にもお言葉をいただきましたので、6月に開催した五重相伝会のお礼参りも兼ねて、ご挨拶に伺いました。

訪れたのは12月初旬、コートがいるかわからないくらいの暖かい気候でした。午後からの予定でしたので、午前中は私が2年間過ごした佛教大学の浄山学寮がある大本山の清浄華院にお参りに行ってきました。本堂でお参りをし、懐かしさを感じていざ知恩院へ。



京都御所の近くの大本山 清浄華院

三門を抜けて男坂を上ろうとすると巨大なモニュメントが目に入ってきました。こちらは大阪・関西万博アイランド館で展示された「Magnus Rinn (マグナス・リン)」という、高さ約6メートル、重さ約2トンの輪状モニュメントです。知恩院の造園業者さんが、アイランド館の造園をおこなったことがきっかけで作者が知恩院に訪れ、たたずまいや建築に感銘を受け、ぜひ展示したいと願



黄金に輝くマグナス・リン





御影堂

い実現したとのこと。間近で見ると本当に巨大ですが、この輪状でそして金色というのが知恩院の雰囲気と絶妙にマッチしていて、いつまでも見ていたいと思うほどでした。今年の9月まで展示しているとのことですので、どうぞぜひご覧ください。

その後、伊藤唯眞猊下とお会いすることが叶い、色々とお話しさせていただきました。昭和6年生まれとのことですが、本当にお元気で、激励のお言葉もいただき、最後は握手までさせていただきました。

さて、知恩院にお檀家の皆様とお参りした団体参拝旅行は平成22年でした。その後は平成27年に長野善光寺、令和5年に東京増上寺に行っております。そろそろまた行きたい、という声もちらほらといただいておりますので、そのお声も大きく聞こえるようになれば、次は是非とも知恩院への団体参拝旅行も検討しようかと思っております。



左：太田真海 中央：伊藤唯眞 猊下 右：新谷仁海 執事

仏さまのおはなし ⑫

皆さま新年あけましておめでとうございます。本年も昨年同様、檀信徒の皆さんにとって健やかで穏やかな一年になりますことを心よりお祈りいたします。

さて、今回は「観音菩薩（聖観音）」さまのおはなしをいたしました。観音さまは様々なお姿をもって衆生、すなわち我々を救って下さる仏さまであることを言及しましたが、今回は「〇〇観音」といった著名な観音さまについておはなししましょう。また、阿弥陀如来の脇侍として観音さまと対をなす「勢至菩薩」についてもおはなししましょう。

◆観音菩薩（色んな観音さま）②

慈悲の象徴であり、衆生を救うためにその姿を自在に変える観音さま。この思想は『法華経』の「観世音菩薩普門品」に説かれています。相手の能力や境遇に応じて仏、菩薩、天、王、あるいは男女など、三十三の姿に身を変えて現れるとされています。こうした変化身の観音は「三十三観音」と総称され、日本各地の霊場巡礼の基ともなっています。

「十一面観音」は、頭上に十一の顔を持つ観音さまです。正面の慈悲相に加え、怒りや悲しみ、憤りなど多様な表情を持つことにより、衆生のあらゆる感情や苦悩に応じて救済することを示しています。地方の古寺に多く、民間信仰とも深く結びついてきました。そのご利益は除災除疫。あらゆる方向からの願いを聞き入れるとされます。新善光寺の輝雲台の納骨堂（新納骨堂）のご本尊は、この十一面観音です。

「千手観音」は、無数の手と目を持つ観音で、千の手はあらゆる方向へ救いの手を差し伸べる力を、手のひらの目は苦しみを見逃さない智慧を表すとされます。実際の造形では四十二臂で表されることが多く、一本の手で二十五の世界を救うと解釈されています。奈良の唐招提寺や京都の三十三間堂の像が有名です。そのご利益は除災除病。また敬愛（夫婦円満・恋愛成就）とされます。

「馬頭観音」は、頭上に馬の頭を戴く忿怒相の観音で、煩惱を力強く打ち砕く存在です。特に畜生道の衆生救済と関わりが深く、日本では農耕馬や旅の安全を祈る信仰対象として、道端や村落に多く祀られてきました。

新善光寺でも札幌精肉協会を施主とした「獣魂祭（食肉として頂戴した命を供養する法要）」を毎年勤めています。境内の南側に馬頭観音の石碑を祀っています。馬頭観音のご利益は畜類救済、息災、交通安全などがあるとされます。

このように観音さまは、単一の固定した姿ではなく、人々の苦しみや願いに応じて多様な形を取り、衆生に対して柔軟な形でお救いくださる仏さまです。現代は多様な時代ともいわれますが、まさに観音さまの救済は多様性。そのことが

時代や階層を超えて広く受け入れられてきた理由であり、文化や人の心に深く根付いているのではないのでしょうか。

◆勢至菩薩

勢至菩薩は智慧と実践力を象徴する菩薩で、特に浄土教において重要な位置を占めています。阿弥陀如来を中心とする浄土三尊の一尊（向かって左側）として、観音菩薩とともに阿弥陀如来の脇侍を務め、衆生を極楽浄土へ導く役割を担っています。

勢至菩薩の名は、正式には「大勢至菩薩」といい、「大いなる智慧の力によって悟りへ至らしめる者」という意味を持ちます。「勢」とは力、「至」とは到達を表し、智慧の力によって煩惱を打ち破り、正しい覚りへ導く菩薩であることを示しています。観音菩薩が慈悲をもって衆生を救済する存在であるのに対し、勢至菩薩は智慧とお念仏の実践を通して救いを完成させる仏さまとして位置づけられています。

経典上では『観無量寿経』や『阿弥陀経』などに登場します。『楞嚴経（唐の時代に訳された経典）』という経典では「念仏三昧（お念仏することで、一切の雑念を払い、深い心の静寂（禅定）と仏との一体感を体験する仏教の修行法・境地のこと）」を説いた菩薩として記され、仏を念じ続ける一心の修行によって悟りへの道が示され、後の浄土教思想に大きな影響を与えたとされます。

そのお姿は、頭上に宝瓶を戴く姿で表されることが多く、この宝瓶は智慧の水を満たす器を象徴し、迷いを洗い清める力を意味するとされます。その穏やかな表情は、観音菩薩の柔和さとは異なり集中と精神的な力強さを感じさせるといわれています。

日本では、平安時代以降、阿弥陀信仰の広がりとともに勢至菩薩への信仰も定着しましたが、観音菩薩ほど独立して祀られる例は少ないとされます。しかし、浄土宗をはじめ念仏修行を重んじる宗派においては、修行を支える智慧の象徴として重視されています。

勢至菩薩は、慈悲と智慧という仏教の二大要素のうち、智慧を体現する存在として観音菩薩と対を成し、衆生救済の完成を示す菩薩です。仏さまとしてのご利益は智慧明瞭、家内安全、除災招福とされています。

さて、長期にわたり連載してまいりました「仏事のおはなし」ですが、今回をもって終了いたします。

読んでくださった皆さまに厚く感謝申し上げます。本誌面では既存の連載の他、新しいシリーズも始まると思いますので、今後とも「北縁」を宜しく願い申し上げます。
(文：堀内 和紀)

壇ノ浦で“波の下の都”を思う

瀬戸内海の西の端、山口県下関の壇ノ浦は、いまからおよそ840年前、わずか8歳の安徳天皇が入水されたところ（じゅすい）です。平清盛の孫である安徳帝は、時代に翻弄されるかのように、あどけない可愛らしい命を海に投げ出さねばならなかったのです。幼い帝は、「私をどこへつれていくのですか」と問うたのか、祖母である二位の尼が、「波の下にも都はありましょう」と答えた『平家物語』などのお伝記に伝えられています。なんとせつなく、骨身に染みる出来事でありましょう。

二位の尼が言う“都”とは、どんな都なのでしょう。どうやら、ここで言う都とは、政治の中枢であったり、権力争いで人が傷ついたりの上り下りするような世界ではないよう（ぜんどうだいし かんぎょうのしょ じょうぜん ぎ いざいなん）です。善導大師は『観経疏』定善義の中で「帰去来（しょうびょう）この生平（のち）をおえて後かの涅槃（ねはん）の城（みやこ）に入らん」とお示し（しめ）します。善導大師は、私たちお念仏者にこう問いかけておられます。さあ、参りましょう。この悲喜こもごもの一生涯を終えた後は、如来さまの真実の世界である極楽浄土という悲しみのない安住（みやこ）できる城（みやこ）に参らせていただき（おもむ）ましょう、と。善導大師がお示し（しめ）の城（みやこ）と二位の尼が言う都は、同じ趣（おもむ）きを醸（かも）す言（ことば）の葉（は）だと感じます。

田中木叉師のお歌が胸に響きます。「苦（くるしみ）は業障（ごうしょう）の垢（あか）おとし つらき心（こころ）は磨（みが）き砂（すな） 苦（くるしみ）は苦（くるしみ）ながらも今（いま）しばし やがて古（ふる）里（さと）おやの里（さと） 永遠（とわ）の命（いのち）の都（みやこ）入り」。お念仏を申したからといって、苦しみや悲しみが消えてなくなるわけではありません。苦は厳然として私の身の上（みんの上）にあります。お念仏の日暮（ひぐらし）らしの中で、その苦（くるしみ）すべてが、お浄土（じやうと）という真実（まこと）の都（みやこ）へ往（むか）くための道（みち）しるべ（しるべ）と頂戴（ちやうたい）できるのが、お念仏者（ねんぶつ）の尊（たう）いところ（ところ）です。

安徳帝（あんとく）の御陵（みさき）にお参（ま）りをして、目の前（まへ）の穏（おだ）やかな波（なみ）を眺（なが）めると、時空（とき）を超（こ）えて人の営（いひ）みとはなん（なん）なのかな（かな）などと、思（おも）いを馳（は）せること（こと）ができた（できた）ような気（き）がします。

〈文：立花 俊輔〉



九州国立博物館で行われた特別展 「法然と極楽浄土」を観てきました



浄土宗開宗 850 年を記念して開催されてきた展覧会が、東京上野の東京国立博物館（令和 6 年 4 月～6 月開催）をかわきりに、京都国立博物館（令和 6 年 10 月～12 月開催）を経て、九州国立博物館（令和 7 年 10 月～11 月開催）で完了いたしました。

九州国立博物館は、太宰府天満宮に隣接しており、合格祈願なのかあまたの学生さんのお参りの姿を目にしました。令和 7 年は、九州国立博物館が開館して 20 周年だったようで、それを記念した企画として来場者に梅が枝餅の無料券を配布していました。私もそのご相伴にあずかり、おいしく頂戴しました。

太宰府は大陸との交流の要所であり、古くから栄えていました。博物館の常設展には、その歴史を感じる品々が展示されており、当地の風土を感じました。
〈文：立花 俊輔〉



心理カウンセリングを通じて②

めくちほどものい 目は口程に物言う

長尾 省行

前号は心理カウンセリングとの出会い、私たちの脳の仕組みについて少しお伝えさせていただきました。今回は、私たちの五感についてお届けできる範囲内でお伝えさせていただきます。早速ですが、五感とは（視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚）を指します。その中で嗅覚・味覚・触覚を「身体感覚」とまとめて指すこともあります。私たちは人生を歩いていく上でこれらの感覚がいかに大切か皆さまも既にご存じかと思います。前号で、脳は「現実と想像の区別が出来ない」とお伝えさせていただきました。現実を実感する、体験するのも五感あつてのことです。想像も同じです。外部からの情報を視覚から、聴覚から、身体感覚から得て、各々のフィルター（育った地域、環境、家族構成など）を通し、脳へ記憶します。想像は今まで蓄積した記憶をもとに内部の情報を引き出しイメージすることです。

まず視覚ですが、タイトルにありますように「目は口程に物言う」ということわざがありますが、心理学にも応用されております。相手の目の動きによって、事実なのか、想像なのか（嘘）、現在、過去、未来のことなのかなど、質問に対する反応した目の動きによって、察することが出来るのです。このことわざの起源は江戸時代中期にまで遡るとされております。中国の古典「孟子」にも記されております言葉が由来の様です。当時から様々な対人関係の中で、相手のしぐさをよく観察していたと言えましょう。

また、人それぞれに優位感覚というものがあります。どの感覚を使うのが得意かということ。視覚優位の方の特徴は、話す言葉が視覚から得た情報そのまま話す方や何かを思い出す時、考え事をする時に上を向く傾向があります。上方を向くと視覚にアクセスされるので、視覚的に覚えやすい、思い出し易いという利点もあります。また、早口になる傾向もあります。

今は冬ですので、「冬」を自分なりに相手に伝えるとき、どのような伝え方になるでしょうか？ 例えば、私の場合「雪で辺り一面が真っ白な景色で、寒さで吐く息が白く、行き交う人々が肩を縮こませ歩いている」と言うような表現になります。この文章でお気づきになられた方もいらっしゃると思いますが、私の優位感覚は視覚ですので、見たままの情報が言語化されやすいのです。この場合、同じ優位感覚の人ならば、同調されやすいのですが、優位感覚が違う方にだと、いまいち伝わりにくいということもあります。話が伝わりにくい、理解しにくいと言う経験もあるかと思いますが、それは相性が悪いわけではなく、優位感覚の違いと言う理由もあるはずですので、そう思うだけでも相手に対して気持ちにゆとりが出てくると思います。が、恥ずかしながら私の妻にとある場所の行き方を聞いたところ、「バァーっと真っ直ぐ行って、角をキュッと曲がってバァーって行ったら着くから」……。来年こそは心にゆとりを持ちたいものです……。

ご当山にお勤めさせていただき、12月で一年が経ちました。まだまだ至らないところがあると思いますが、今後ともよろしくご願い申し上げ、今回のお話を締めさせていただきます。次回は「聴覚優位」について触れさせていただきます。

復活！ズッコケ尼さんの仏教こぼれ話②

一期一会 出逢いの喜び

こまきね きんしょう
駒木根 琴生



令和8年が始まった。皆さん、佳き年をお迎えのこととお慶び申します。昭和は昨年百年を越えた。その昭和生まれの私は新しい令和の流れの速さを感じ、種々戸惑うことが多い上に、健康も伴わず生き難い昨今である。また、肉親や知人との別れも急に多くなった。こんな時こそお念仏に精進し、阿弥陀様の本願力にお任せする外にはありません。

一方、別れに比べて出逢いが著しく少なくなった。日本には古来より、茶道界の「一期一会」という美しい言い伝えがある。この紙面を与えられた機に感謝して、私の出逢いを紹介したい。まず、一つ目は昨年届いた6才迄近所に住んでいた文子ちゃんのお便りです。

「叔母さん随分とご無沙汰しております。お手紙を書くのは20数年ぶりです。文は2月で49才になります。今では22才の息子と二人暮らしです。山の手の家があった場所に行く度に、叔母さん元気かなと思ひ出して、逢いたくなります。誕生日にはいつも叔母さんのプレゼントの海の本の最後のページのメッセージや、叔母さんの言葉、今でも忘れていません。『さっちゃんの小さな妹』本にはあやちゃんという名の妹が出ている等、覚えています。文の人生では色々な出来事があったけれど、文にとって、叔母さんと過ごした時間がとつてもかけがえのない時間であり、今の文がいるのだと思います。小学校に入る前には、平仮名や足し算、漢字で名前を書けるように教えて貰い、保育園にも行かず一人で留守番にしていた私の居場所でした。感謝しかありません。ありがとうございました。来年も叔母さんにとって穏やかで心豊かな一年であります様に。長い冬、体調崩さぬ様に。文子より」

この文ちゃんの一字一句には優しさに溢れ、雲一つない青空の如しで喜び一杯にさせてくれた。返事が遅れたが、1月6日に我が家での再会が出来た。

二番目には社会福祉法人札幌慈啓会「ふれあいの郷」での奈美さんとの出逢いである。

専業主婦の私が出家した仏縁は、昭和40年生まれの長男の自死に因る。後一週間で14才の誕生日を迎える息子は真っ赤に染まる夕陽を西方極楽浄土と重ね逝ってしまった。残された父親、弟の悲しみは、現わす言葉がなかった。供養すべく母の道はお念仏の道と決めた。平成17年以後、「ふれあいの郷」へ通い始めた。毎回、20人程の人々が集い法話や人間に関わる健康の疑問等…実に熱心に聞いてくれた。その中に奈美さんが休まずに参加していた。その奈美さんの息子さんが我が家に来て下さったのが昨年11月のことだった。手には彼女に送った二枚のハガキ(京都からの絵ハガキと数年前の年賀状)で、見せてくれた。用件は102才のお母さんの慈啓会病院の入院だった。私との再会を待っていることも知った。すぐに会いに行くと、とても喜んでくれた。また会いましょうと約束し、2日後に行ったが、お亡くなりになられていた。

悔やみながら供養合掌した。短い出逢いだったがお念仏の大切さを伝えられた出逢いになった。今年85才になる私、残りの一期一会の喜びに向かって……。



清璋寺から

明けましておめでとうございます。どうぞ本年もよろしく願いいたします。

さて、1月3日にお正月の恒例法要であります「修正会並びに新春大祈願法要」をおこないました。多くの方にお参りいただき、一緒にお念仏をおとなえできたことを感謝いたします。

また増設しました納骨堂もおかげさまで好評をいただいております。ご見学は随時受け付けておりますので、ぜひお問い合わせください。

(清璋寺 住職 太田光顯)

〈2026年の法要予定〉

3月22日(日) 春彼岸法要

8月11日(火) お盆の法要

9月20日(日) 秋彼岸法要



清璋寺 札幌市手稲区西宮の沢5条1丁目19-35 TEL 011-668-5110

清璋寺は毎週火曜日を寺院閉館日としております。お参りの際は、お寺にお問合せください。

写経のすすめ

新善光寺では毎月第4土曜日に“仏教講座”をおこなっております。内容は写経を主としており、お檀家様以外の方々にもご参加いただいて、心が落ち着く、綺麗になったとお声もいただいております。写経はお手本を上から筆でなぞるような形ですので、初めての方でも比較的簡単におこなうことができます。写経のあとは一緒にお参りして、書いたお経の説明もしております。



参加費は500円で事前申込・道具は不要です。どうぞお気軽にご参加ください。

次回2月28日(土) 14時 「写経」

3月28日(土) 14時 「写仏」

以降毎月第4土曜日に開催予定。

慈啓会から

社会福祉法人札幌慈啓会は創立100周年を迎えました

札幌慈啓会は、令和7年10月5日に創立100周年を迎えました。節目の年を迎えるにあたり、さまざまな記念事業を実施いたしました。

物故者慰霊追悼法要

9月30日（火）、慈啓会と隣接する「浄土宗藻緑山 観音寺」にて、「法人創立100周年記念物故者慰霊追悼法要」を執り行いました。



創立100周年記念 第27回 福祉・病院学会

10月5日（日）13時より、京王プラザホテル札幌にて、「創立100周年記念 第27回 福祉・病院学会」を開催しました。学会テーマは「人とつながる 未来へつなげる ～札幌慈啓会100年の軌跡と向き合うべき社会課題～」です。



当日は216名の皆さまにご参加いただき、活発な質疑応答や意見交換が行われました。学会では、これまでの歩みを振り返るとともに、今後の地域福祉・医療のあり方を考える貴重な機会となりました。

また、節目の年にあたり、当法人の今後の方向性を示す「札幌慈啓会 法人ビジョン2025」を正式に発表。札幌大谷大学の学生による産学連携制作の「ビジョンストーリー」ムービーも上映されました。

創立100周年記念祝賀会

同日18時より、京王プラザホテル札幌にて「創立100周年記念祝賀会」を盛大に開催しました。

ご来賓・ご招待者・職員あわせて408名にご臨席いただき、100年の歩みを祝い、温かな時間を共有いたしました。

100年の歴史の重みを胸に、札幌慈啓会は次の時代に向けて新たな一歩を踏み出します。

これまで支えてくださったすべての皆さまに心より感謝申し上げますとともに、今後とも変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。



札幌慈啓会総合相談室のご案内 ☎️ 0120-83-8291 お電話受付時間／8:45～17:00(土日・祝は除く)
E-mail info-jk@sapporojikeikai.or.jp
専門スタッフが保健・医療・福祉などのご相談に応じます。 相談無料

当山のお仏像を紹介します⑯ ^{じ ぞう ぼ さつ はん か ぞう}
地蔵菩薩半跏像

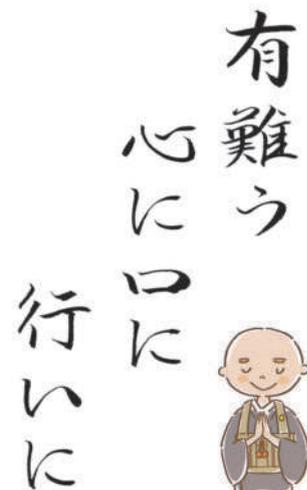
境内の南側、山門と鐘楼の間のお庭におられるのが、今回紹介するお地蔵さまです。石造りで、左手に宝珠ほうじゆを持ち、右手は残念ながら欠けてしまっています。座り方に特徴があり、右足は組んで、左足は下している半跏はんかというお姿です。蓮華座に腰をおろしておいでですが、下している足元にも蓮華が咲いています。長い間、風雪に耐えつつ、見護みまもってくださるお姿に趣きを感じます。



同封の年回忌表の言葉

有難う 心に口に 行いに

“いつも感謝しているよ”と書いていても、声にして相手に言わなければ、その気持ちは伝わりません。また、口先だけで行動がともなっていなければ、偽りになってしまいます。心と声と行動が一致するとき、それが本当になるのです。お念仏で最も大切なのは、声です。「南無阿弥陀仏なむあみだぶつ」と声にだしてお称えなむしていれば、たとえ初めは信心が薄くとも、声につけてお浄土を慕う心そなが具わり、自然と手を合わせる身とならせていただけるのです。



北縁 なんでも Q & A

いつもご質問、感想等、ご投稿いただきありがとうございます。
新しい年、皆さんが穏やかで素晴らしいお時間を過ごせることをお祈り申し上げます。
今年もこのコーナーでは皆さんのご質問に可能なかぎりお答えしてまいります。また各コーナーの感想などもお送りいただきますと大変励みになりますのでどうぞよろしく願いいたします。

Q 実家の仏壇を引き継ぐものがなくて、自宅に夫の家の仏壇と私の実家でまつっていた仏壇、ふたつおいています。宗派的にいけないことなのでしょうか。

A この質問に関しては、経験上何年かに一度ご相談をうけることがあります。結論から申し上げますと、お仏壇が一つの家に二宗派分安置してあることは、仏教的に見て「ばちあたり」だったり、「悪いこと」ではありません。日本における仏教の歴史や先祖崇拜の習俗の実情を踏まえれば自然な形である場合も少なくありません。

日本では、江戸時代以降家ごとに宗派が固定される「檀家制度」が定着しましたが、これは幕府における鎖国政策の一つで、仏教本来の教えから必然的に生じたものではありません。婚姻によって異なる宗派の家同士が結ばれたり、本家と分家で別の寺院に属したりすることは往々にしてあり、その結果、一つの家に二宗派の仏壇が置かれるケースは古くから存在してきたようです。

「二宗派の仏壇は良くない」「ほとけ様同士が争う」といった話を耳にすることがありますが、これらは仏教の教義に基づくものではなく、後世に生まれた俗信や慣習的な不安に過ぎません。仏教では、如来や菩薩は人間のように対立や嫉妬をする存在とは考えられておらず、また宗派の違いによって功德が失われるという考え方もありません。

ただし、実際の生活においては配慮すべき点があり、それは本尊やお経、焼香の作法、法要の進め方などが異なるため、扱いが曖昧になると拝む人が戸惑うことがあります。そのため、異なる宗派の本尊や位牌を一つの仏壇に混在させることは避け、可能であれば仏壇を分けて安置するのが望ましいとされています。また、どちらか一方を形式的に扱い、もう一方を軽んじることは、家族間の感情的な問題を生む原因にもなります。

菩提寺についても、事前に事情を説明し、理解を得ておくことで安心です。多くの寺院では、家族構成やその家の歴史的背景を踏まえ、現実的な対応をしてくれます。例えばよくある話は、「宗派の違う位牌を仏壇に奉っていいものか？」という相談です。回答としては「同じご先祖であることには変わらないので、丁重にお奉りください」ですが、ご本尊はどちらかの宗派に合わせ、その宗派の供養によって護るということをお薦めしています。

大切なのは、宗派の数や形式ではなく、ご先祖を敬い、感謝の気持ちをもって供養を続ける心です。その姿勢がある限り、二宗派の仏壇が家にあることを過度に悪いことと考える必要はありません。

〈東京別院 霊源寺より〉

霊源寺は新善光寺の東京別院（会社でいうところの支店）の機能を持ち、東京近郊にお住いの新善光寺のお檀家様のご供養も執り行っております。先日も川崎市にお住いのお檀家様のお葬儀もおこないました。

また、春と秋のお彼岸には法要をおこなっており、次回の春彼岸法要は3月23日（月）で新善光寺副住職が導師をする予定です。

最寄り駅は地下鉄東急目黒線「不動前」駅、JR 山手線「五反田」駅で、立地面も良いことから納骨堂も好評を得ております。ご供養のことでお聞きになりたいことがあればお気軽にお問い合わせください。



東京都品川区荏原 1-1-2 TEL 03-3494-1083

東京別院霊源寺 検索

編集後記

明けましておめでとうございます。どうぞ本年もよろしくお願いたします。

前号でもこの欄でお伝えしましたが、現在の編集体制を見直し次号より新たな形での出発とさせていただきます。担当を始めて早12年、試行錯誤しながら作ってきましたが、そろそろ見直す時期がやってきました。どうぞ今後とも何卒よろしくお願いたします。

次号は5月発行予定です。それまではInstagramなどSNSで情報をあげていきますので、そちらもご覧ください。

(太田真海)

※新善光寺の日々の情報は各種 SNS にて公開しております。どうぞ、そちらもご覧ください。そしてこの「ほくえん」のご感想もお待ちしております。



ホームページ



YouTube



Instagram

新善光寺寺報
Hokuen 59
北 縁

発行 / 2026年1月発行

発行責任者 / 新善光寺住職 太田真琴

〒064-0806 札幌市中央区南6条西1丁目 [TEL] 011-511-0262 [FAX] 011-511-4706

[ホームページ] <http://s-zenkoj.com> [Eメール] s-zenkoj@crux.ocn.ne.jp